

西宮市獅子ケ口の須恵器

関西学院大学考古学研究会

1. 経 過

ここに紹介する土器は、20数年前に地元の方が永年採集し、当研究会に持ち込んだものである。したがって、採集の正確な年月・経過・場所については不詳な点が多い。

2. 位 置（第1図）

現在の西宮市獅子ケ口町は、阪急苦楽園口の北方約700mの地点で、夙川上流の東岸沿いにあたるが、明治40年代の地図によると、かつての獅子ケ口とは現在の神園町をも含む夙川東岸一帯を指したようである。この地区は、夙川の流れによって形成された扇状地の標高30m～50mの緩斜面である。

獅子ケ口附近には神園古墳群が分布する。当古墳群は現在神園1号墳^①（夙川学院構内古墳）・神園2号墳（神園古墳）・神園3号墳^②の3基が確認されている。いずれも6世紀後半から末頃の築造と考えられて



第1図 獅子ケ口の位置（太線内が採集地域）

いる。

周辺では、東南東約 1 km に奥畑古墳、約 1.8 km に具足塚古墳^③、南西約 1.6 km に高塚山古墳群、西約 1.5 km に八十塚古墳群がある。

3. 遺物（第 2 図）

採集された土器のうち実測可能なものは 9 点であった。

(1)は杯蓋で、口径は 13.4 cm を測る。天井部外面は回転ヘラ削りを施し、内面は静止ナデを行う。他はロクロナデである。胎土・焼成ともに良好で、色調は黒灰色を呈す。なお、天井部外面に二条のヘラ記号が刻されている。

(2)は形態と手法の特徴より、(1)の杯蓋と対になるものと思われる。口径は 12.0 cm で立ちあがりはやや内傾し、端部は丸くおさまる。黒灰色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。

(3)は短頸壺の口縁部で、口径は 7.7 cm を測る。外面・内面ともにロクロナデをおこなうが、とくに内面は強い。胎土・焼成ともに良好で、色調は黒灰色を呈す。

(4)は小型の壺で、外反した口頸部と肩の張った胴部をもつ。胴部外面はほぼ全面にわたってカキ目調整が施され、ほかはロクロナデによって仕上げる。色調は淡黄灰色で、胎土は良、焼成はやや不良である。

(5)は台付長頸壺の胴部と脚部である。最大腹径は 16.9 cm であり、胴肩部に 2 条の凹線をめぐらす。胴下半部外面にヘラ削りを施したのち、ロクロナデによって全面を仕上げる。胴下端部内面には、接合痕が残る。色調は淡青灰色で、胎土、焼成ともに良好である。

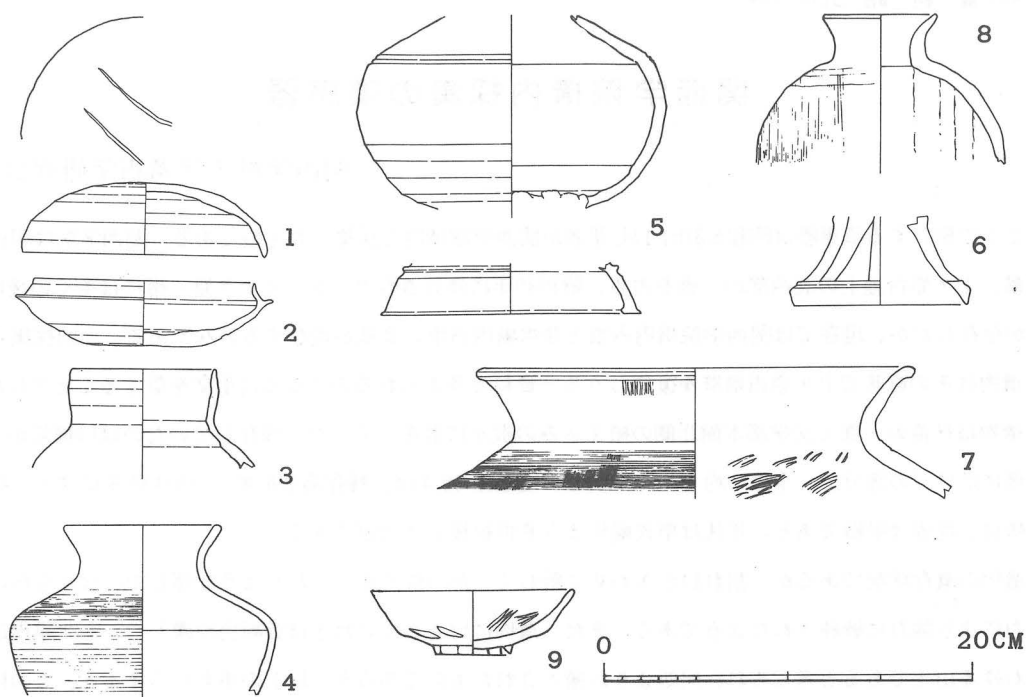
(6)三方透しを配した高杯の脚部である。色調は外面が淡灰色で内面が青灰色である。胎土は 1 mm 程度の砂粒を多く含むが良好であり、焼成も良好である。磨滅が著しい。

(7)は大型甕の口頸部で、口径は 23.0 cm を測る。外面は平行タタキ、内面は同心円タタキを施したのち、体部外面にカキ目調整をおこない、さらに全面をナデる。色調は外面が黄灰色、内面は自然釉により黒色を呈する。胎土は 1～2 mm の砂粒を含み、焼成は良好である。

(8)は提瓶で、耳を欠く。丸味のある体部をもち、残存する片面にカキ目調整を施す。外反した口頸部はロクロナデによって調整される。内面には巻上げ痕と粘土円板接合痕が残る。色調は淡青灰色で、胎土、焼成ともに良好である。

(9)は素焼きの皿で、口径 11.0 cm、器高 3.5 cm、高台ははりつけたのち、指でつまんで調整したもので高さ 0.5 cm である。内面はヨコナデ調整されたのち軽くヘラ磨きを施す。色調は淡黄灰色で一部に黒色の媒火痕がある。胎土、焼成は良好である。これは他の遺物とは時期が隔たり、年代はかなり下ろう。

以上 9 点の他に『関西学院考古』第 3 号で紹介した提瓶の完形品 1 点がある。(P 15、遺物番号 30)



第2図 獅子ケ口採集遺物 実測図

4. 小 結

遺物の出土状況が不明のため、遺跡の性格等について深く論及することはできない。しかし、採集された須恵器については(6)のほかはすべて6世紀後半のものであることから、おそらくは後期古墳に伴う遺物であろう。なお(6)は、5世紀後半から6世紀初頭の時期を示し、他の遺物と分けて考えられる。

獅子ケ口には神園古墳群が存在する。当古墳群は現在3基の古墳が確認されるにとどまるが、これも神園古墳群に伴う資料とすれば、3基のほかに消失した古墳があったと考えられる。したがって神園古墳群は、隣接する八十塚古墳群、仁川流域の後期群集墳の規模に及ばないとしても、これらの古墳群の間隙を埋める後期群集墳として把握されよう。(中野・三谷・土谷)

<註>

- ① 檀本誠一ほか「夙川学院構内古墳調査報告」(『兵庫県埋蔵文化財調査報告第1集』昭和46年)
- ② 西宮市教育委員会により昭和52年8月緊急発掘された。概略は、衣川真澄「西宮市神園3号墳調査記」(『関学考古、77』昭和53年)によりたい。
- ③ 勇正広ほか「具足塚発掘調査報告」(西宮市文化財調査報告書第一集 昭和51年)